

50615

教科書文庫

5
810
41-1947
01304 49578

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

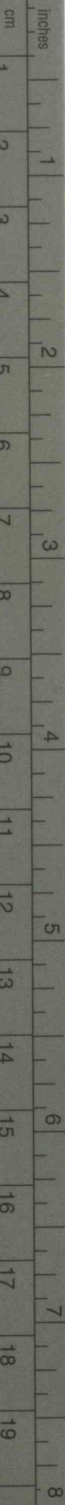


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中等國語

文部省
P.T.A. 一

(2)



中央図書館

中等國語

文部省



(2)

広島大学図書

0130449578



目 録

一 あゆのかげ	一
二 ノートの中から	二
三 心の小徑	九
四 創始者の苦心	十五
五 雪もちの竹	十八
六 実物とその模型	二十四
七 小品二題	三十三
八 非凡なる凡人	三十九
九 ビノチオ	五十二

一 あゆのかげ

背なかにほくろのあるあゆが
日のさす静かな瀬のうちに泳ぎ澄んでいる。
幾列にもなつて、
やさしいからだを光らしている。
その影は白い砂地に
かけ絵のように、
大きくなつたり小さくなつたりして、
時にはぼやけたりする。
水のかげまで玉をつとめて、
底砂へ落ちて行く。
ちいさい物音にさえ
花のように驚いては散つて、
また集まるあゆ。
すらりと群れをぬいた大きなあゆが、

ときどき群れをすべっているのか、
すこし瀬がしらへ出たり、

ほこらしく高く泳いで水面へ

ばちりとはねくり返る。

しんとした波紋がする。

あとは土手の上の若葉のにおいがするばかり。

(室生犀星の作による)

二 ノートの中から

おもちゃは野にも畑にも

わたしの幼い時のように山の中に育った子供は、めったにおもちゃを買うことができません。たと
い、ほしいと思いましたが、それを賣る店が村にはありませんでした。

おもちゃがほしくなりますと、わたしは裏の竹やぶの竹や、麦畑にほしてある麦わらや、それから
じいやが野菜の畑の方から持って来るなすだの、かぼちゃだの中へ、よくさがしに行きました。

じいやが畑から持って来るなすは、わたしにへたをくれました。そのなすのへたを両足の指の間に
はさみまして、つま先を立てて歩きますと、ちょうど小さなくつをはいたようで、うれしく思いまし
た。

かぼちゃもわたしに、へたをくれました。

「ごらん、わたしのへたの堅いこと、まるで竹の根のようです。これをあまえさんのいさんのとこ
ろへ持って行って、この裏の平らなところへ何か彫ってあもらいなさい。それができたら、紙の上へ
押しつけてごらんなさい。あもしろい印形ができますよ。」と、かぼちゃが教えてくれました。

裏の竹やぶの竹は、わたしに竹の子をくれました。「それで竹の子の手あけを造れ。」と言ってくれ
ました。

「こいつも、あまけだ。」

と、細く竹の割ったのまできれてよこしました。その細い竹を削りまして、竹の子の手あけにさしま
すと、それでさげられるようになるのです。水もくめます。わたしは表庭のなしの木やつばさの木
下あたりへ小さな川のかたちをこしらえました。寄せ集めた砂や土を二列に盛りまして、その中へ水
を流しては遊びました。竹の子の手あけでさげて行った水が、その小さな川を流れるのを楽しみまし
た。

麦畑に熟した麦は、わたしに穂先の方の細い麦わらと、胴なかの方の太い麦わらとをくれました。

「これをどうするんですか。黄色い麦わらでなけりゃいけないんですか。」

と、わたしが聞きましたら、麦の言うには、

「なに、青いんでもかまいませんが、なるなら黄色い方がいい。麦は熟するほどじょうぶですから
ね。この細い麦わらの穂先の方を軽く折ってあまなさい。氣をつけてしないと、折れて、とれてし
まいますよ。それから太い麦わらの節のある下の所を一寸ばかり、あまえさんのつめでお裂きなさい。」

これも氣をつけてしないと、みんな裂けてしまいますよ。太い麦わらには必ず一方に節のあるのがあります。それができましたら、細い方の麦わらを太い麦わらの裂けた所へさしこむようになさい。」なるほど麦の言う通りにしましたら、子供らしいおもちゃができました。

細い麦わらを下から引くたびに、麦の穂先が動きまして、「今日は。今日は。」と言うように見えました。

わたしは、種々なおもちゃが野にも畑にもあることを知りました。竹やぶから取って来た青い竹の子、麦畑から取って来た黄色い麦わらで、おもちゃを手造りにすることの、いうにいわれぬ楽しい心持をおぼえました。

畑のすみちちようちんをぶらさげたようなほおずきが、わたしにほおずきの実をくれまして、そのしんを出してしまつてから、古い筆の軸で吹いてごらんと教えてくれました。筆の軸は先の方だけを小刀か何かで幾つにも割りまして、あさがおの形に折り曲げるといいのです。その受け口へ玉のようにふくらめたほおずきを載せ、下から吹きましたら、軽いほおずきがくる／＼と舞いあがりまして。そしてあさがおのりの管の上へおもしろいように落ちて来ました。

書籍

一

名もない草が路ばたの石のわきに咲いていました。そこへ学生が通りかゝりました。

「学生さん、今日は。おまえさんは何をそんなに急いでいるのですか。」と、その草が声をかけました。

「わたしですか。わたしは貧しいものですから、読みたい本も思うようには手にはいりません。でも、わたしは好きですから、いろ／＼な本を読んで、お友だちにおくれたくないと思うのです。わたしはあつちの人の生涯せいかいにも、こつちの人の生涯にも、心の旅をしてみたいと思うのです。わたしは小さな旅人です。それでこうして急いでいるのです。」

と、学生が答えました。

「まあ、この石の上に腰を掛けてみてください。読もうとさえ思えば、本はこの石の上にもありますよ。わたしも名もない草ですが、おまえさんのような人に読んでもらいたいと思って、こうして小さな本を拡げていますよ。」

と、その草は言いました。

二

講堂に近い所に新築せられた赤れんがの建物の二階が、わたしの学校の図書館にあててありました。学校には、アメリカ人の教師が多く、その人たちが國へでも帰ろうとするおりに寄附して行ったものもありましたから、その時分の学校の図書館としては、珍しい本も少なくなかったのです。

ある日、私はその二階へあがってみました。大きなテーブルを前にひかえて、本の出し入れを調べている図書館の係も、学校へ来て勉強している人でした。その二階では、高い声で話をする者もありませんでしたから、まるでそこいらは、しんとしていました。たまに聞えて来るものは、鉛筆を削る音くらいのものでした。

わたしは本だなの間を見てまわりました。本と本がたくさん向かい合つて並んでいます。だれも読

もうとするものもないような本が、ほこりの間から顔を出しているのもあります。いすでも持って来なければ手のとどかないような高いたなの上まで、いっぱい古い本が並んでいます。

そこは書籍の墓地でした。いろ／＼な本を書いた人たちが、その静かな所で眠っていました。わたしはそういうお墓の並んでいる所へ行つて、そこに眠っている人たちの名まえを、あちこちと読んで歩きました。

あるお墓の前に行きました。そこにはローマ字で、

詩集 ロバート・バーンズ著

としてあるのを見つけました。

わたしもまだ少年でした。バーンズというイギリスの詩人を知ったのも、それがはじめての時でした。不思議にも、こちらで少し目を覚ましたら、そこに眠っていると思つた人が、お墓から起きあがって来ました。あのバーンズのお墓の方から、青々とした麦畑の中に鳴くひばりの声がして来たり、スコットランドあたりの若い百姓のうたが聞えて来たりした時は、わたしもびっくりしました。その時になつてわたしも、そんなお墓に眠っていると思つた人たちが、わたしたちの胸に、生きかえり生きかえりする時のあることを知りました。

落ち葉

毎年十月の二十日といえは初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武蔵野へ来る冬、浅々とした感じのよい都会の霜、そういうものを見なれているさみに、この山の上の霜をお目にかけて。このくわ畑へ三度か四度もあの霜が来てみたまえ、くわの葉はたちまち縮みあがつて焼け焦げたようにな

る。畑の土はぼろ／＼にたゞれてしまふ……見ても恐ろしい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへゆくと、雪の方はまだしも感じが柔らかい。降り積もる雪はむしろ平和な感じを抱かせる。十月の末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいたかさの葉がもしろいように地へ落ちるのを見た。肉の厚いかさの葉は霜のために焼けそこなわれたり、縮れたりもしないが、朝日があつて来て霜のゆるむころには、重さに堪えないでもろく落ちる。しばらく私はそこに立って、茫然とながめていたくらいだ。そして、その朝はことに烈しい霜の来たことを思った。

十一月にはいつて急に寒さを増した。天長節の朝、起き出して見ると、一面に霜が来ていて、くわ畑も野菜畑も家々の屋根もみな白く見渡される。裏口のかさの葉は一時に落ちて道もうずもれるばかりであつた。少しも風はない。それでいて一葉二葉ずつ静かに地に落ちる。屋根の上の方で鳴くすゝめも、いつもより高く勇ましそうに聞えた。

空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるような日だった。私は勝手もとのたき火に凍えた両手をかざしたくなつた。たびをはいたつまささも寒くしみて、いかにも恐ろしい冬の近よつて来ることを感じた。この山の上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、ほとんど五箇月の冬を過ごさねばならぬ。その長い冬ごもりの用意をせねばならぬ。

こがらしが吹いて来た。

十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押し寄せて来るような音に驚かされて、目が覚めた。空を通る風の音だ。時々それが静まったかと思うと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。

ことに南向きの障子にはばら／＼と木の葉のあたる音かしてその間には千曲川の川音も平素から見るとずつと近く聞えた。

障子をあげると、木の葉はへやのうちまでも舞いこんで来る。空は晴れて白い雲の見えるような日であったが、裏の流れの所に立つやなぎなどは烈風に吹かれて髪を振るうように見えた。枯れ／＼としたくわ畑に茶かっ色に残った霜葉なども左右に吹きなびいていた。

その日、私は学校の行きと帰りともに停車場前の通りを横ぎって、真綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手ぬぐいをかぶって両手をそでに隠した女だのの行き過ぎるのに会った。往來の人々は、いずれも鼻しるをす／＼たり、目の縁を赤くしたり、あるいは涙を流したりして、顔色は白っぽく、ほち・耳・鼻の先だけは赤くなって、身を縮め頭をかゝめて、寒そうに歩いていた。風をうしろにした人は飛ぶように、風に向かつて行く人はまた、力を出して物を押すように見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の目には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日のこがらしが野山を吹きまくる光景はすさまじく、烈しくまた勇ましくもあつた。樹木という樹木の枝はたわみ、幹も動揺し、やなぎ・竹の類は草のようになびいた。かきの実でこずえに残つたのは吹き落された。うめ・すもも・さくら・けやき・いちじょうなどの霜葉は、その一日でこと／＼く落ちてた。そして、そこ／＼に集まつた落ち葉が風に吹かれては舞いあがった。急に山々の景色はさびしく、明かるくなった。

(島崎藤村の文による)

三 心の小徑

樺太アイヌ語は、北海道アイヌ語とどれほど違うか、樺太アイヌは、どんな物の言い方をしているか。アイヌ特有の敘事詩が、もしやそこにも傳承されてはいはないか。今まで抱いていたアイヌ語学上の疑問とその解決とが、この方言に照らして、もしや実証することができるのではあるまいか。こういう空想が、いっばいに私の心を占めて、夢にまで見る誘惑となり、とう／＼樺太へ、單身踏査を思い立つにいたつたのである。

「それは明治四十年の夏のことである。小樽をたつたのは七月の十二日、樺太の奥山には、木立にまじって、山ざくらがちらほら咲いているころであつた。大泊に船待ちをし、毎日濃霧をかこちながら、しびれをさらして、やつと、米とみそとを用意して、役所の見まわりの小蒸氣に乗せてもらつて、目ざす東海岸へ船出をしたのは十二日め。それでも海の上はまだ霧が深く、三晩、船の上に寝て、二十七日の朝、やつと本船のボートで送られて、オチヨボツカのアイヌ部落へ最初の足跡を印したのである。」

「思い思つてはる／＼たずねて來たものの、部落の人にとっては、私などどこからか迷つて來たいぬころほどの興もひかない存在だつた。なまじいに、民政署の船に乗つて來た洋服姿は、役所の看守人でもあるかのような印象をさへ興えて、ともすれば、ちょっと疑い深い目を光らせ、私の行く所、立つ所、だれもみな背を向けてしまい、口をつぐんでしまう。笑いさゝめいていた者も笑いをささめ、

寄り合っていた者も散じてしまふ。そのさびしさはたとえようもない。かいてもくことばが通ぜず、片言隻語も採集できずに、むなしく一日が暮れて行くのである。

「役所の船から取りたものだから、いる所だけは、酋長の冬期の住みかをがらんどろにあけて、ひとりぼつんといさせてくれたのである。また、三度三度の食事は、同じように髪を垂らした入れ墨の娘がかわるがわる来て、黙って、私の米とみそとを小なべへ入れて持ち去って、一時間もすると、温かい飯とするとを作って来て、黙って置いて行ってくれる。たゞし、物を言いかけたら最後、ぐんぐん逃げて行ってしまう。晝のうちは、まだ絵にかいたようなアイヌの姿をまのあたりで見ているばかりでも慰めになったが、夜になって、鼻をつままれるのもわからないようなやみの中に、いそ打つ波のざあっと引いて行くわびしい音のみを聞いていると、物言う相手もないさびしさがこみあげて、おしの上にくらにさえ生まれて来たかのような寂寥を感じた。」

「二日めも同じように暮れ、三日めもまたそれをくり返さなければならなかった。四日めのことだった。さびしさは、もはや單なるさびしさではなく、東京をたつて一箇月、ついになんの得るところもなく帰らなければならぬのさうかという不安と憂悶とが頭をかき乱して、茫然として屋外に立ったちやうどその時——ふと見ると、うしろに子供たちが何かわめきながら、無心に遊んでいる。行くともなく、その方へひき寄せられて行つたのは、ことばの一はしでも拾いたかつたからである。じっと耳を傾けると、なんとという発音だろう、しゃっくりしながら物言うようなわめきようで、一言も耳にとまらぬ。たゞし、子供だけに、私が近く立っても、別に氣にもせず、夢中にさえずって遊んでいる。ふと、そのひとりの腰にさかっている小刀にさわって、北海道アイヌ語で「それはなんなの。」

と尋ねてみた。子供らはいっせいに私の顔を見た。と思つたら、一度は「わっ。」とはやしたてて、くもの子を散らすように逃げ散つた。「通じないかな。」とひとりつぶやきながら、途方にくれていると、また三々五々集まつては、何か大声にわめきながら遊ぶのである。また寄つて行つた。今度はことばをかえて、ひとりの子の耳にさげた環を指さして、「なんというものか。」と問うてみた。また振り返つて、全部の子供が私を仰いだが、「何を言つてるんだ。」といった調子に、「わあっ。」とわめいて逃げ出した。

「子供らのうちに、絵に見る唐子のような着物——多分、満洲方面からの外來品——を着ているのがひとりあつた。そのかつこうがちよつとちもしろかつたので、單語を採集するはずの手帳へ、しょうことなしに、その子を写生しはじめた。」

私が、その子を見ては、鉛筆を動かし動かすのを目ざとく見つけた子供のひとりが、まずなんとかわめいた。他の子も、私を見て、またなんとかわめいた。遊ぶのをよして、みんな私を注視した。まっさきに見つけた子が、まずちやうと、しゃがんでいる私へ近寄つて来て、物珍しげに私のかくののをのぞいた。たちまち、どや／＼とやつて来て、みんなでのぞいた。年かさのが、唐子の服装をした子を指さして、「おまえがかかれたぞ。」とでもいうような様子をした。すると、わい／＼と言ひ出して、私の横からのぞく者、うしろからのぞく者、中には無遠慮なのが、指を突き出して、もう私の画面をついて、「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ。」など言うように、自分の発見を得意になつて、説明を引き受けているのさえある。が、ちつともその言うことが聞き取れない。

その時だった。ふと思ひついで、一枚新しい所をめぐつて、だれにもすぐわかるように、大きく子

供の顔をかいてみた。目を二つ並べてかくと、年かさが、一番さきに「シシ、シシ」と言った。他の子供も「シシ」、他のも「シシ」。とう／＼、さしのぞいていた子供の口がみな「シシ」、「シシ」、「シシ」。騒がしいといつたらない。そのさまはちょうど、「目だよ、目なんだよ。」「うん、目だ。」「目だ、目だ。」とでも言うように聞えたのである。

そうだ、北海道アイヌは「目」をば「シク」という。樺太ではそれを「シシ」というのかもしれない、ということが頭へひらめいた。急いで絵の目から線を横へ引つばって、手帳のすみの所へ *shish* と記入し、それからゆう／＼と鼻をかいて行つた。年かさの子が、鋭い声で「エトゥーブイ、エトゥーブイ」と叫ぶ。と、残りの子供らも、声々に「エトゥーブイ、エトゥーブイ」。私はおかしくなつたのをこらえて、また鼻の尖端から線を引いて行つて、その端へ *point* と書きこんだ。そうして、口をかいて行くと、やつぱり年かさの子をまつさきに、「チャラ、チャラ、チャラ」と大騒ぎ。まゆをかくと、「ラル、ラル」。頭をかくと、「サバ、サバ」。耳をかくと、「キサラーブイ、キサラーブイ」。

たちまちのうちに肢体しだいの名が十数箇、期せずして採集できた。おかしいやら、愉快やら。こうなつたら、もうなんでもない。向こうから争つて言ってくれるのだから。

たゞ、私は、「なに」という一語がほしくなつた。それさえわかれば、心のまゝに、物をさして、その名を聞くことができるのである。そこで、ふと思いついて、もう一枚紙をめくつて、今度はめぢやくちやな線をぐる／＼、ぐる／＼引さまわした。年かさの子が首をかしげた。そうして、「ハマタ」と叫んだ。すると、他の子供もみな変な顔をして、口々に、「ハマタ」、「ハマタ」、「ハマタ」。

うん、北海道で「なに」ということを「ヘマンダ」という。これだ、と思つたから、まず試みよう。と、身のまわりを見まわして、足もとの小石を拾つて、私からあべこべに「ハマタ」と叫んでやつた。驚くべし、むらがる子供らが私の手もとへくる／＼した目を向けて、口々に、「スマ、スマ」と叫ぶではないか。北海道で石のことを「シユマ」という。してみると、「スマ」は石のことで、そうして、「ハマタ」はやつぱり「なに」ということに違いなさそうだ。

そこで勇氣を得て、も一つ足もとの草を手にもしり取つて、「ハマタ」と高くさげると、子供たちは、「ムン、ムン、ムン」と、びよんびよん跳びながら答える。私はうれしさに、子供らといっしょにびよんびよん跳んで笑つた。

おかしかったのは、私が自分の五厘ぐらいしかない七、八本のあごひげをつまんで見せて、「ハマタ」と尋ねた時である。声に應じて、子供らは「ノホキリ、ノホキリ」と答えてくれたので、*nohikiri* 「あごひげ」と記入した。なんぞ知らん、それは下あごだつた。ひげづらになれているアイヌの子供たちの目には、私のつまんだひげなどは、ひげの數にはいらないので、私の指はあごをつまんでいると思つたのである。

私はこうして、たちまちのうちに七十四箇の單語を採集して、元氣づいた。ちりから、河原に集まつてますを捕らえている大勢の大人たちの所へちりて行つて、覚えてばかりのぼや／＼の單語を勇敢に使つてみた。河原の石を指さしては、「スマ」と叫び、青草を指さしては、「ムン」、ますを見ては、「ヘモイ」、ますの頭を指さしては、「ヘモイサバ」、ますの目を指さしては、「ヘモイシシ」、ますの口を指さしては、「ヘモイーチャテ」。

「これまで、むずかしい顔ばかりしていたひげづらが、もじゃもじゃのひげの間から白い歯を現わし

た。これまで、そむけそむけしていた婦女子の顔にも、まっさおな入れ墨の中から白い歯が見えた。明らかにみな笑ったのである。中には、向こうから、網を持っている手を振って見せて、「ヤー(網)」と言ったり、砂地を指さして「オタ(砂)」と言ったりした者もある。急いで手帳に書きつけながら、その発音をまねすると、不思議そうに手帳を見に寄って来る者もあった。婦女子の群れでは、「いつ覚えたろう。」とか、「よく覚えたものだ。」とか言うらしい感嘆の声をあげた者もあった。

こうした間に、私と全舞台との間をさえぎっていた幕が、一へんに切って落されたのである。さしも越えにくかった禁園のかさねが、急に私の前に開けたのである。ことばこそ、固くとざした心の城府へ通う唯一の小徑であった。渠成って水いたる。こゝにいたって、私は何物をもためらわず、すべてを捨てて、まっしぐらにこの小徑を進んだ。

一週間の後には、ちよつと私が顔を出しても、右から左からことばを投げられる。朝起きて、河原へ顔を洗いに手ぬぐいをさげて通ると、両側のアイヌ小屋から「どこへ行きますか。」「どうしたんですか。」などと、まるでたんぼのあぜの一步一步にいなごがばたくと跳び出すように、入り乱れてことばがかゝって来、私がうまく答えられたといつては笑い、とんちんかんに答えたといつては笑う。顔を洗っていると、もう子供たちが起きて、うしろへいっばいやって来ている。夜は、さしもがらんだうな私の宿もいっばいになって、身動きもならないほど、若い者や年寄りが詰めかけて、踊る、歌う、しゃべる。

四十日の滞在の後に、たいていの話は支障なくできるようになった上、樺太アイヌ語文法の大要と語彙と、北蝦夷古語遺篇三千行の紋事詩の採録を家づとに、私は生涯忘れがたい思いを残して、この

部落の老若に別れを告げた。

(金田一京助の文による)

四 創始者の苦心

蘭学事始

小塚原に腑分けを見たりし翌日、良沢が宅に集まり、前日のことを語り合ひ、まづ、「ターフル＝アナトミア」の書にうち向かひしに、まことに艦艫なき船の大海に乗り出だせしがごとく、茫洋として寄るべきなく、たゞあきれにあきれてゐたるまでなり。されども、良沢はかねてよりこのことを心にかへ、長崎までも行き、蘭語ならびに章句・語脈の間のことも少しは聞き覚え、聞き習ひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁はいまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、やうやくに文字を覚え、かの諸言をも習ひしことなり。

さて、この書を読み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひしに、「とても、はじめより内象のことは知れがたかるべし。この書の最初に仰伏全象の図あり。これは表部外象のことなり。その名処はみな知れたることなれば、その図と説の符号を合はせ考ふることは、取り付きやすかるべし。図のはじめとはいひ、かた／＼まづこれより筆を取りはじむべし。」と定めたり。即ち、解体新書形体名目篇これなり。そのころは、助語の類も、いづれが何やら心に落ち着きてわきまへぬこと故、少しづつは記憶せし語ありても、前後いつかうにわからぬことばかりなり。例へば、「まゆといふものは

目の上に生じたる毛なり。」といふやうなる一句、髻髻として、永き日の春の一日には明らかに目暮るるまで考へつめ、互ににらみ合ひて、わづか一、二寸の文章、一行も解しえざるほどにてありしなり。

また、ある日、鼻のところにて、「フルヘッヘンドせしものなり。」とあるにいたりしに、この語わからず。これはいかなることにてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。そのころ、辞書といふものなし。やうやく長崎より良沢求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに、「フルヘッヘンド」の積注に、「木の枝を断ちたる跡、その跡フルヘッヘンドをなし、また、庭をさうぢすれば、その塵土集まりフルヘッヘンドす。」といふやうに読み出だせり。これはいかなる意味なるべきかと、また、例のごとくこじつけ考へ合ふに、わざまへかねたり。時に翁「思ふに、木の枝を切りたる跡いゆればうづたかくなり、またさうぢして塵土集まればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中において堆起せるものなれば、『フルヘッヘンド』は『うづたかし』といふことなるべし。されば、この語は『うづたかし』と訳してはいかん。」と言ひければ、おの／＼これを聞きて、「はなはだもつともなり。『うづたかし』と訳さば正当すべし。」と決定せり。その時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の壁をも得し心地せり。

かくのごときことにて、推して訳語を定めたり。その数も次第次第に増し行くこととなり、良沢のすでに覚えぬし訳語書き留めをも増補しけるなり。その中にも、「シンネン」などいへること出でしにいたりては、いつかうに思慮の及びがたきことも多かりき。これらはまた、行く／＼は解すべき時も出で來ぬべし。まづ符号を附けおくべしとて、丸の中に十文字を引きて記しおきたり。そのころ知

全カを(うづたかし)

らざることをば「響十文字」と名づけたり。毎会いろ／＼に申し合はせ、考へ案しても、解すべからざることをば、その苦しさのあまり、それもまた「響十文字」「響十文字」と申したりき。しかれども、「なすべきことはもとより人にあり、成るべきは天にあり。」のたとへのごとくなるべしと、かくのごとく思ひを勞し、精をすり、辛苦せしこと一箇月に六、七回なり。その定日は怠りなく、わけもなくしておの／＼あひ集まり、會議して読み合ひしに、実に「不味者は心。」とやらにて、およそ一年あまりも過ぎぬれば、訳語もやうやく増し、読むにしたがひ、自然とかの國の事態も了解するやうにて、のち／＼はその章句のあらさ所は、一日に十行も、その余も、かくべつの労苦なく解しうるやうにもなりたり。もつとも毎春参向の通詞どもへも聞きたゞししこともあり、またその間には解屍のこともあり、獸畜を解きて見合はせしこともたび／＼なりき。

この会業怠らずして勤めたりしうち、次第に同臭の人もあひ加はり寄りつどふことなりしが、おの志すところありて、一様ならず。翁はひとたびかの國の解剖の書を得、直ちに実験し、東西千古のたがひあることを知り明らかめ、治療の実用にも立て、世の医家の業にも、發明ある種にもなしたく、一日も早くこの一部を用立つやうになしみたしと志を起ししこと故、他に望むところもなく、一日会して解するところはその夜翻譯して草稿を立て、それにつきては、その訳述のしかたを種々さまざまに考へなほししこと、四年の間に草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すにいたり、つひに解体新書翻譯の業成就したり。

そも／＼江戸にてこの学を創業して、腑分けと言ひ古りしことをあらたに解体と訳名し、かつ社中にてたれ言ふとなく蘭学といへる新名を首唱し、わが日本國中の通称ともなるにいたれり。これ今時

の隆盛をいたしし嚆矢なり。今をもつて考ふれば、これまで二百年來、かの外科法は傳はりしなれども、直ちにかの医書を訳すといふことは絶えてなかりしか、この時の創業、不可思議にも、およそ医道の大經大本たる身体内景の書にて、これが医書新訳の起始となりしは、不用意をもつて得しところにて、実に天意とやいふべき。

春が来た。 接統助詞

五 雪もちの竹

今から五十年ほど前のことです。はつきりという明治二十八年一月、日清戦争の最中のことです。アメリカのニール大学の教授で、心理学の大家であるラッドという学者が、向こうの雑誌に、日本人の氣質について、意見を發表しました。

その説をごくかいつまんで申しますと、日本人は感情的な國民だということです。あることに感激すると、急にそれに熱中するが、しかし、うまく行きそうもないと、ぶいとほろり出してしまふ。移り氣で、しんぼう強いところがない。それに正しい常識が発達してないため、人民の幸福とか、社会正義とかいうようなことについては、ほとんど考えていない。たゞ上から與えられた忠孝という觀念だけを、無上の道徳と信じている。だからかれらは主君のためには、惜しげもなく、自分のいのちを投げ出したり、最愛の子どもをぎせいにしたりするというような残忍なことさえも、平氣でやる。日本人は賢い國民であり、美しい感覺を持つているが、感情的で、批判力に乏しいことが問題である。おそらく日本人は、今後世界の注意をひくだろう。しかしながら、強い道徳的な力によって、その氣

風が改められないならば、日本人は、世界の人民のうちで、偉大な國民とはなれないだろう。だいた、このようなことをいっているのです。

みなさんは、この話を、どうお聞きになりましたか。最初に申しましたように、これは五十年前の意見です。しかも、その時、日本は、のぼり坂の時代にあつたにもかゝらず、わが國をこういうふうに見てあつたということは、実に、ぎよつとさせられます。ことに最後のところで、「もし、強い道徳的な力によってその氣風が改められないならば、日本人は偉大な國民にはなれないだろう。」といっている点は、五十年まえに、よくもこれだけ日本を見ぬいたものと、たゞ／＼舌を巻くばかりです。今われ／＼は偉大な國民になれなかつたくらいではありません。世界において、最もみじめな國民になりさがつてしまつたのです。

こういう結果になつたのは、もちろん、軍國主義者や、その手さきの者のしわざに相違ありません。けれども、罪のあるのはそういう連中だけではありません。國民の氣風、國民の道徳、そういうものの中にも、大きな責任があると思います。軍部や右翼がのさばつたのは、確かに悪いには相違ありませんけれども、しかし、それをのさばらせたのは、國民の中にも、それをのさばらせる何かがあつたからです。もし、國民の氣風、國民の道徳が、このまゝであるならば、どれだけ戦争犯罪者が罰せられても、また一方で、いくら新日本の建設などと呼んでも、日本は、ほんとうには、立ちあがれないと思います。

けれどもこのことは非常に大きな問題で、短いラジオの講演では、とても、まとめることは困難です。すから、こゝでは、私はさくらの花を例にとつて、いくらか、それと、つながりのある話をしてみます。

しよう。

「花」といえば、さくらとさまつているくらい、さくらは、日本の代表的な花になっています。なぜさくらが、こんなに國民にすかれるのかというと、むろん、その花が美しいからに違いありませんが、その美しさがあくどくなくて、ほんのりとした、あわい感じのものであることも、日本人の趣味に合っているからでしょう。また、「ばつと咲いて、ばつと散る。」というところなども、氣みじかな、にぎやかなことのすきな、日本人の氣性に、ぴったり、はまるのかもしれない。ことに、その散りざわは、ふぜいがあるので、昔から詩や、歌に、たくさんよまれていきます。それから、散るということ、佛教の「無常」という思想が結びついて、この花のかけに宗教的なものが、いつか宿るようになってきますと、ついでに「花はさくらぎ、人は武士。」などということわざが生まれてきます。散りぐあいのいさぎよいところが、いのちよりも名誉を重んずる武士の間で、ほかの花よりも一段と尊重された原因ではないかと思われれます。そして、この見方、氣風というものは、單に武士階級だけでなしに、廣く一般民衆にまで及んでいったものなのです。

日本人の氣質というものは、ラッド教授のいうように、感情的というひと色で塗りつぶせるものかどうか、私は疑いを持ってありますが、しかし、とにかく、日本人が感情的だという点は、これはいふことができないと思います。そして、そういう感情的な國民であるところから、さくらのような、散りやすい花に感激するのだと思います。しかし、散るということに、あまり價値をおき過ぎると、どんな場合にでも、いのちを投げ出しさえすれば、それが最高の道德だと、そんなふうに見える人間が出てきます。批判力の乏しい、感情的な人々の間では、これは、起りがちなことなのです。しか

し、これでは、「人間は、一体、なんのために生き、なんのために死ぬのか。」さっぱり、わかりません。日本では、いのちを捨てることを、一つの道德のように教えています。こんな危険な思想はありません。死ぬことよりも、まず生きることです。人間は、何を信じ、何をなすべきであるか、これが、まっさきの問題です。信ずるものの対象を誤り、なすべきことを取り違えたら、個人としても、國民としても、滅びるよりほかはないでしょう。信ずべきもの、恐れ、つゝしむべきものは、この世には、たゞ一つしかありません。心から、かしらを垂れるべきものは、あまが下には、ただ一つしかありません。人間はその一つのもののためにのみ、生きながらえてゆくべきです。万一、どうしても生命を断たなければならぬという、よぎないはめに陥つたとしても、それは眞理のため、正しい主義主張をたて通すという場合にのみ、許されることであって、そのほかは、考えられませんが、たとえそれは、「忠義」という名目であっても、生命をなげうつべきものではありません。人間は、どこまでも生きぬくことに全力を盡くすべきであって、それが、生まれてきたものの最大の責任です。いのちを投げだすことを、最高の道德だと考えたり、それをほめたゞえる思想は、封建主義的な思想です。こういう氣風というものは、ぜひとも、根だやしにしなければなりません。それでなくては、ほんとうの學問は榮えません。よい文化は生まれてきません。平和な國はうち立てられませんが、

その意味で、私は、さくらの花を、あまりもてはやすことに、大きな疑問を持っています。それは、もとよりさくらに罪があるわけではありません。さくらに、さまざまの意味をつけている人間に罪があるのです。しかし、この花になすりつけられている「意味」は、もう洗い落すことができないほど

深いものになっていきます。そして、その「意味」なるものは、たゞでさえ感情的な民衆を、いよ／＼はしゃぎまわらせ、うわっ調子にし、生命をかるんずる氣風を、高めがちです。しかも、この花の中からは、これからの日本人にとって最も大事な、ねばり強い氣力、一つの新しいものを、どんな苦勞をしてでも、築きあげようとする精神、そういうものを、読みとることはできません。この花は、古い日本精神を代表することはできても、新日本の道徳を象徴する資格はないと思います。

私は、昔から竹が大好きです。前のうちでも、今の住まいでも、私は庭や入口に、竹を植えてあります。「わが宿のいさゝむら竹吹く風の」という、家持の有名な歌がありますが、竹の葉ずれの音を聞く味わいというものは、格別なものです。それに、すうっとまっすぐに突っ立っている形も、私は好きなのです。途中で曲がったり、くねったりしないで、いちずに天を目ざしている姿は、たゞ一つのものだけを信じて、生きてゆこうとしている心と、何か似かようなものがありはしないでしょうか。

また竹は、どんな時でも、一本だちでいるということがありません。自分ひとりだけ太ろうとか、高く伸びようとかいう氣持もありません。かれらは、いつも同胞といいますが、社会といいますが、みんながいっしょになって共同の生活をしています。そして土の下で、しっかりと手を握り合っています。かれらは暴力によって、切り離さない限り、感情や利害によって、分裂するということのような、そんな卑劣なことはしません。

それから、あのつや／＼した幹の色はどうでしょう。照りを帯びた、あの緑の色の、しぶい趣は、どうでしょう。しかも、春・夏・秋・冬、四季を通じて、決してその色を変えろということがない。それは幹だけではありません。小枝の先のさ／＼っぱにいたるまで、堅く操を守っています。春から夏

にかけて、わか竹が、すく／＼と伸びてゆきますが、これは、きまつて、おや竹よりも太い。そして、せいも高くなります。子の方が親よりも、若ものの方が老人よりも、りっぱなものになってゆくところも、私は実に、うれしく思っています。それに、竹の子がたべられることも、ありがたいことです。うちに出た竹の子を、子どもたちといっしょに掘るのは、なか／＼楽しみなものです。

また竹は、幹の中ががらんどうですが、それでいながら実にじょうぶです。ちつとやそつとの力では、容易に折れません。これは力学の法則にもかかってのことなのです。竹はあんなふうに見えても、なか／＼科学を知っているわけですね。いや、そればかりではありません。意志の力も非常に強いのです。竹は常に天を目ざすことを忘れていませんが、しかし冬になって、雪がきた時には、閉口します。かれはしかたがなく、かしらを垂れます。だが、どん／＼雪が降り積もってくると腰まで曲げなければなりません。ついには、あたまを地面にこすりつけられる。けれどもかれは、じいっとこらえている。どんなに、上からの力が強かろうと、口を結んでこらえている。決して、ぼきんと折れるような、ふがいのないまねはしません。雪は必ず、いつかは降りやむことを知っているからです。そして雪があがったら、自分の力で、積もっているものを拂い落して、びいんと、もとの姿に返ってゆきます。

もちろん、竹をこんなふうに見ることは、問題です。しかし、氣のめいつた時には、私はあり／＼こんなことを考えて、自分を励ますこともありませう。しかし、自分が竹がすきだからといって、私は、自分の趣味を他人に押しつけようとは思っていません。けれども、日本は今、きびしい冬のさ中に立っているのです。当分、春がくるとも思われません。花が咲き、つばめの飛んでくる季節がこよ

うとも、それは、われ／＼の春ではありません。われ／＼は、なあ、幾年も、幾年も、深い雪の下で、苦しい生活を、忍ばなければならぬのです。その意味で、この話はみなさんの心構えの上に、また國民の氣風を高める上に、多少の参考にならないこともないと思います。

(山本有三の文による)

六 実物とその模型

一

われ／＼がことばを用いて物を考える時には、まず、一々の実物に名を付け、実物のかわりに名を用いて考えるが、物に名を付けるに当たっては、無意識ながら一種の細工を加えるために、実物それ自身と、その名によって言い表わされる物との間に、いくらかの差が生じている。一種の細工とは、即ち、実物を模型化することであるが、これが、一方においては、ことばの便利な点であり、また他方においては、ことばが人間を誤らせるものでもある。実物に名を付けて、これを模型化する際に行われるおもな細工は、似た物を同じ物とみなすことと、境界のないところに境界を造ることである。

私は、数年前に、「境界なき差別」と題して、ちよそ宇宙間の物には、差別はあるが境界はないと論じたことがある。これは、私が、ことばを離れて直ちに実物に接してみると、ぜひとも、この点に氣がつかねばならぬと、感じたことを述べたのであるが、今これをわかりやすくするために、まず、差別はありながら境界のないことの、最もめいりようなものの例をあげてみると、にじの色などもその

一つである。紫・紺・青・緑・黄・かば・赤と七色の差別は明らかであるが、その間に判然たる境はどこにもない。赤からは自然にかばに移り、かばからは自然に黄に移り、同じ色のところはどこにもなく、また、急に飛んで移るところも一箇所もない。晝夜の差別もその通りで、晝は明かしく、夜は暗く、その差別は明らかであるが、夜が明けていつとはなしに朝となり、日が暮れていつとはなしに晩となり、その間に、判然とした境界はどこにもない。四季の差別もこれと同じく、知らぬまに春は夏になり、知らぬまに夏は秋になる。曆を見れば、何月何日が立春で、何月何日が立夏であると書いてあるが、実際その日になってみると、前日に比べてなんの異なつたこともない。晴雨のごとさも、明らかに晴れた日と、明らかに雨の降る日との差別はめいりようであるが、その間に種々の程度の曇つた日があつて、晴天に入れてよいか、雨天とみなしてよいか、判断に苦しむようなあいまいな氣も、決してまれでない。寒暖といい、長短といい、黒白といい、ちよそ、対をなしたことは、その両端を取れば差別はめいりようであるが、その間には、どこにも判然たる境界のないものばかりである。中華民国や日本の絵では、雲に明らかな境がえがいてあるが、実物に接してみると、さわめて漠然たるもので、富士山などに登る時には、知らぬまに幾度も雲にはいつたり、雲から出たりしている。地図を開いて見ると、海と陸地との境が明らかな線で示してあるが、実際に海岸へ行つて見ると、波が絶えず寄せたり返したりして、どこまでが陸地の領分で、どこからが海の領分やら、正確に定めることはできない。このように、常々明らかに境界があるごとく考えていたものも、実物に当たつてみると、決して、そこに境界はない。森や、やぶの周囲の境なども、その通りで、地図にはかけるが、実際には存在しない。きれいに断ち切つた紙の縁などを見ると、いかにもそこにめいりような境界があるごとく

く思われるが、これは、肉眼で見ると生ずる誤りであつて、もしも、これを何百倍かの顕微鏡で見たらば、無数の纖維が不規則に乱れまじつて、あたかも竹やぶのごとくに見えるであらうから、ここにも決して、判然たる境界を定めることはできない。以上は、空間における境界について述べたのであるが、時間における境界も、これと同様で、常々境があると思つてゐることも、實際を調べてみると、決して境は附けられない。例えば、だれは何月何日の何時十分に生まれたとか、何時何十分に死んだとかいつて、生まれるのも、死ぬのも、時の一点にあるごとくにみなして、人間の生涯の始め終りにめいりような境を附けておくが、実際には、生まれるには、生まれはじめてから生まれおわるまでに、相当に時間がかゝり、死ぬにも、死にはじめてから死におわるまでには、相当に時間がかゝる。その上、今が生まれはじめる時であるとか、今が死におわつた時であるとかいふことも、決して判然とはいわれぬ。電燈のスイッチを一つひねれば、たちまち明かるくなり、またひねれば、たちまち暗くなつて、明かるかつた時と暗くなつた時との間にも、判然たる境があるごとく思われるが、これも、電氣が来て細い糸が光を放つまでには、いくらかの時がかゝり、電流が絶えて光が消えるまでにも、いくらかの時がかゝる。たゞ、その時間にはなほ短いので、われ／＼にはあたかも、なんの長さもない時の一点のごとくに感ぜられるのである。かりに、特別急速度の活動写真で撮影し、これをきわめて緩やかに映したならば、あたかも、夜が明けて朝になり、日が暮れて夜になるのと同様な変化があるだけで、決して、その間に境界はないであらう。

また、普通のことではあゝ対立するもののごとくにみなし、かつ、その間に判然たる境があるかのごとくに思つてゐるもので、実際には、決して対立しないものが、いくらもある。例えば、曲と直とか、動と静とかいふ類がそれである。曲という中には、はなはだしく曲がつたものから、わずかに曲がつてゐるものまでの間に、無数の種類があるが、直というものは、全く曲がらぬものがたゞ一種あるのみである。その上、實際について調べてみると、絶対に曲がつていないというものは、ほとんど一つもなく、多くは、かすかに曲がつてゐるものの曲がりを大目に見て、直と名づけてゐるにすぎない。

動と静ともこれと同様で、動という中には、はげしい動からかすかな動までの間に、無数の種類があるが、静というものは、全く動かぬというたゞ一種があるのみである。その上、實際には、絶対に動かぬというものは、ほとんど一つもなく、たゞ、動きようのかすかなものを、かりに静と名づけてゐるにすぎない。有と無とか、異と同とかいふのも、理屈は全くこれと同じで、有には、多量にあるものから、きわめて微量にあるものまで、無数の種類があるが、無には、全くないという一種類しかない。異にも、はなはだしく異なるものから、かすかに異なるものまでの間に、無数の程度があるが、同には、絶対に異ならぬという一つの場合しかない。かように考えてみると、曲と直、または、動と静というごとき対語は、決して、同じ價値に反対の符号を附けたというようなわけのものではなく、直とは、わずかに、無数に並んでゐる曲の一方の極端に位する一点にすぎず、静とは、わずかに、無数に階段のある動の一方の極端に位する一点にすぎない。ことばをかえていへば、曲の最も少ないのが直であり、動の最もかすかなのが静である。したがつて、直は曲の中の特殊の場合、静は動の中の特殊の場合と考へるのが、至当と思われる。更に、同じ考へ方で推せば、無は有の一種、同は異の一種と断定することができるが、この考へをもつて、実物に接してみると、實際はいつもその通りで、

有と無との間にも、異と同との間にも、決して境はない。氣をつけてみると、世間の人々が同じとみなしている物も、決して真に同じではなく、ことごとく少しづつ必ず違っている。

私は、ことばから離れて、直接に実物に当たって見た結果として、次の通りに考える。世の中には、差別はあるが境界はない、また、同じ物が二つは決してないと。

二

ところが、前にも述べた通り、ことばを用いてもものを考えるには、まず、実物にそれ／＼名を付けてかゝらねばならぬが、物に名を付ける際には、知らず知らずの間に、脳で細工を施して、実物とそれに附けた名が表わす物との間に、差を生ぜしめている。即ち、名が表わす物は、実物それ自身ではなくて、人間がそれに細工を加えて造った模型である。そうして、その細工というのは、一つは、似たもの間の相違をけずりとして、全く同一の物にすることで、他は、境界のないところに勝手に手を張って、領分の境をめぐりようならしめることであるが、これだけの細工を施せば、実物はそれだけ変化して、もはや、実物のまゝの実物ではなく、単に取り扱いに便利な模型となってしまう。例えば、いぬを見て、これに「いぬ」という名を付ける場合には、一匹一匹のいぬの間に見られる種々の相違を、ことごとくけずりけずって、すべてのいぬに共通な性質だけを備えた模型に造り改め、それにいぬという名を付けているのである。実際に生きているのは、ベスとか、シロとか、ボチとかいう一匹一匹のいぬであつて、大きいのが、小さいのが、黒いのが、白いのが、一匹ごとにそれ／＼違つている。いぬという名が表わしているようないぬの模型は、むしろ実際には存していない。ねこでも人間でも、まつでもうめでも、およそ普通名詞ならば、みな、こゝに述べたと同様の方法で、実物

から造りなした模型に附けた名まゝである。かような次第で、名が代表しているのは、実際に存する実物そのものではなくて、実際には存在していない模型であるが、これが、即ち、物を考えるに用いる道具として、ことばが最も有効であるゆゑである。もしも、人間が、実物をたゞそのまゝに見るだけの力しか持たず、これを模型に造りなしてそろえるという力がなかったと仮定したならば、「このいぬは黒いが、あのいぬは白い。」というような、簡単さわるまる文句さえも言えず、したがつて、それ以上にこみいった考へは、全くできなかったに違いない。されば、実物を模型化して、それに名を付けるという脳髓の働きは、実に、人間の文化發達の根底の一つとみなしてもよいであらう。

なお、物に名を付けて、その名の意味を正確に定めようとするれば、本来境界のないところに、勝手に境を造らなければならぬ。これも一種の模型化である。もつとも、物の名を漠然たるまゝに使つていけば、その境を定めずにあつてもなんのさしつかえをも感ぜずにすむ。例えば、身体の部分についても、腹が痛いとか、背中がかゆいとか、手を蚊にさされたとか、わきの下にはれものができるとかいって、それですませている間は、わざ／＼境界を定める必要も起らないが、腹とはどこからどこまでをいうか、背中とはどこからどこまでをいうかと、やかましく論じて、一字一字に確かな定義をくだそうとすると、ぜひとも境をこしらえてかゝらねばならぬ。即ち、解剖学書のさし絵にあるごとく、人体の表面に幾つもの線を勝手に引いて、数多くの区域に分け、こゝが上腹部とか、こゝが下腹部とか一区一区の領分を定める必要を生ずる。人間をはだかにして、人体の実物を見ると、その表面には、なんら区域の境界はないのに、解剖学書の人体の図を見ると、あたかも地図のごとくに、一面に境界線をえがいてあるが、これが実物と模型との相違である。物に名を付け、名に定義をくだそ

うとすれば、よんどころなく、境のないところに境を造らねばならぬが、それだけの細工を加えた以上は、その物は、もはや、実物のまゝでなくて、一種の模型となりおわっている。

差別のあるものは、これを差別的に取り扱うのが当然であろうが、どこかに境界を設けぬと、差別的の扱いはできない。例えば、汽車賃にしても、わずか四キログラムにたりない赤子も、百キログラムもある大男も、同じ金額を拂わせるのは、いかにもむちゃのようであるが、さりとて、体重に比例した賃金を拂わせることは、手数がたいへんで、むろん実行はできぬ。そこで、せめては、赤子と子供と大人との三階級に分けて、そのくらいの程度で差別的の取り扱いをしようとする、赤子と子供との間にも、子供と大人との間にも、たゞ次第に移り行きがあるだけで、どこにも判然たる境界はない。やむをえず、五歳以下は無賃とか、十二歳以下は半額とか、勝手なところに境を設けて取り扱ってはいるが、元來、そこに境界があるわけではない。およそ物に名を付け、名に定義をくだそうとする場合には、いつも汽車の差別的賃金の定め方と同じく、天然には、なんの境界もないところに、便宜上、一本の線を引いて、それを境とみなすのほかはない。したがって、いかなる定義にも、少数の、その網の目をくぐるものがあることは避けられない。哺乳類とは温血、胎生で、からだは毛髪をもつておゝわれている脊椎動物であるという定義に対し、かものはしのような卵生のものや、くじらのような毛の一本もないものがあつても、これは、もとよりやむをえぬことで、定義とは、元來かような性質のものであることを承知して置く必要があろう。

三

物に名を付ける際には、一箇一箇の間の相違をけずり去り、似た物を同じ物に造りなますといったが、数を数えるということは、同じ物が、幾つかそろっている場合に限り、行われうることである。

ところで、私が、実物に直接に触れて経験したところによると、世の中に全くあいと同じというものは、決して二つとはない。いかによくあい似た物でも、よく調べてみると、その間には、必ずいくらかの相違がある。これを、あい同じと見るのは、相違の点をけずり去って、そろった模型に造りなますたからである。一つ／＼みな違っている実物については、 $1+1=2$ ということもできぬ、 $1 \times 2=2$ ということもできない。かような式が成り立つのは、たゞ人間が自分の脳髓の働きで造りあげた模型についてのみである。されば、数学なるものは、その性質上、全部、模型に対してのみ、よく当てはまるものであるが、模型に当てはまりさえすれば、数学の用はそれで十分であつて、実物には当てはまらぬといつても、もとよりそのために数学の價值がさがるということはない。

果物屋の店に、りんごの荷が到着した。中からは一つ／＼大きさ・色・味・傷の有無、その他さまざまの点で、互にあい異なつたりんごが、数百箇出て來た。かりに大きさによつて一列に並べたら、最大のものから最小のものまで、次第に移り行くだけで、その間に、どこにも一足飛びのところはない。これが、実物そのまゝの姿である。ところが、果物屋の主人は、販賣の都合からこれを幾組かに分け、最も大きな組は一箇十二錢、次の組は一箇十錢、次は九錢、次は八錢と、一々札を立てて階段的に陳列した。かような取り扱いを受けたために、各組のりんごは、一つ／＼の間の相違は全く無視せられて、みな同一の價値を付けられ、上の組の末席のものと、次の組の首席のものとの間には、天然にはなんの境界もないところへ、明らかな境を定められ、その境のあちらとこちらとは、りんごの値が一錢または二錢違うものと定められた。これは模型化せられたりんごの姿である。そこへひと

りの客が来て、十二錢のを五つと、十錢のを十二買って、一円八十錢拂って行った。模型化せられてあったために、計算がすこぶる容易で、賣手も買手も大いに樂をする。もしも、模型化せられていなかったならば、掛け算も寄せ算もできず、不便さわまりないことであろう。されば、実際の取り扱いにおいては、実物を模型化することは、やむをえぬことであり、かつ、行えばきわめて能率の高まることである。

人間が、ことばを用いて物を考えるに当たり、物に名を附けて、名にたよって考えを進めて行く際には必ず、以上の果物屋の主人が、りんごに対して行ったのと、全く同じことをしている。即ち、実物を模型化して、取り扱いに便利にする。あるいは、差異をけずり去って、似た物を同じ物に造りなしたり、あるいは、数多くの物を幾つかの組に分けて、組と組の間には、元來、境界などのなかつたところに、勝手に境界を造ったりする。ことばが、物を考える道具として役に立つのは、全く実物に対して、かような細工を加えるからである。

四

以上述べたように、ことばにたよって物を考える際には、まず、実物を模型化して、模型を実物のかえ玉に使っているということは、私などから見ると、明らかすぎるほど明らかに思われるが、一般からは、ほとんど認められていないようである。それはなぜかと考えるに、おそらく、なれすぎて、全く感じなくなったためであろう。習慣というものは恐ろしいもので、常々見られたものは、それが、当然のように思われ、それと異なつたものは、変に感ずる。例えば宇宙間に地球がころがっているには、上もなく、下もなく、横も縦もないわけであるが、常々地球儀や、地図を見られているために、北極が上を向いていないと、なんだかまちがっているように感じ、オーストラリアを上にした地球の図を見ると、あたかも地球がさかだちをしているような気がする。また地球がその軌道を進んで行くには、いつもほとんど同じ速力で走り続けているのであって、決して、電車のように停留所とまったり、動き出したりするようなことはないにもかゝらず、十二月三十一日と、一月一日との間を、年の境と定めておくと、長い間の習慣の結果として、その時が来ると、なんだか、すべての物が改まるかのような感じが生ずる。されば、ことばを用いて物を考えるに当たって、実物を模型化する習慣が長く続くと、そのことには氣づかなくなり、模型が、即ち実物自身であるように感じ、自分が勝手に造つた境界を、あたかもはじめからあつたもののようにみなすにいたる。世の中には同じ物が幾つもあるように思つたり、名詞には、一々正確な定義がくだせるはずのものと考えて、少しも疑われないのも、右の結果である。しかし、このことに氣づかない人は、世間にはすこぶる多いようで、そのためになさずにはすむべき議論が、有名な学者たちの間に、激しくたくかわされる場合も、決してまれではない。

(丘浅次郎の文による)

七 小品 二題

かくれんぼう

「もういいかあ、もういいかあ。」遠くでこういう声がする。かくれんぼうのちが言っているらしい

が、「もういいかあ。」は少しだがぬけていると思つた。わたしは二階で手紙を書いている。まもなく下の往來をひとり草履、ひとりはくつで駆ける足音がして來た。ふたりは駆けながら、何かせわしく話し合つていた。それがやむと、今度は景氣のいい調子で、「もういいよう。」わたしの妹の淑子の声である。

わたしは手紙を書き續けていた。しばらくして封をしながら、氣がつくと、下では子供らが何かしきりに言い合いをしていた。わたしは机越しに手を延べ、障子を五寸ばかりあけて見た。前のうちの少しくぼんだ門の所に淑子とオデットという淑子よりも一つか二つ下のフランス人の小娘とが並んで立っている。それと向かい合つてジョールという娘のにいさんが短い半ズボンの下から白いすらりとしたすねを出して立っていた。「もういいかあ。」はこの先生だった。

なんでもジョールさんのおにがあらからかけて來ると、ふたりは藝もなく並んでそこに立っていたらしい。さがすまでもなくふたりはすぐ見つかつたが、さてどちらが今度おにになるか、それがわからず、今そのもんちやくのさいちゅうらしかつた。

「ジョールさんがそこで首をこうなさつたでしょう。（と淑子は自分の首をめぐらして見せ）そしてら、わたしとオデットさんと、どっちが先に見えて。」

淑子はそれさえはつきりすればこの難問題は解決されるのだというように、口を堅く結んで熱心にジョールさんの顔を見つめている。

ジョールさんは弱つた。ふたりのどちらがまず自分の目に映つたらう。ジョールさんは赤皮の半ぐつの足をそろえ、まっすぐに立って、うわ目使いに淑子と妹の顔を見比べながら考えている。

金具のついた皮のバンドをゆるくしめ、腹を突き出し、両の手をうしろで握り合わせ、黙つて考えているジョールさんの様子はいかにも子細らしくちかしかつた。

淑子もオデットさんも耳を澄まし、ジョールさんの口から出ることをばを待っている。しばらくして、「オデットだ。」とジョールさんはさつぱり言い切つた。緊張はゆるむ。

「ジョールはうそ。いやだわ、わたし。」オデットさんはまゆ根を寄せ、肩につくほど首を傾け、うしろ手に門の戸をすつて横歩きをしながら泣き出しそなた顔をした。

淑子は氣の毒をうに黙つてしばらくそれを見ていたが、

「そんならいいわ。わたし、おにになるわ。」と言つた。

「オデットずるい。」にいさんは妹をにらんだ。

「いいことよ、わたしがおにになるから。早くお逃げなさい。ね、早くお逃げなさい。わたしここにこうしているから。」淑子は両の手を顔に当ててうしろを向いた。

「オデット、おいで。」ジョールさんは不興げに言つた。

オデットさんは不平らしい顔をしながら、それでも門の戸を離れて出て來た。そして顔を隠している淑子の方をもう一度振り返つてから、急にいきおいよくにいさんのあとを追つて駆けて行ってしまった。

わたしは障子をしめた。

しばらくして、「もういいかあ。」という淑子のかん高い声がした。

暗夜行路

（志賀直哉の文による）

「ある曇った冬の日暮れである。私は横須賀発のぼり二等客車のすみに腰をおろして、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には珍しく私のほかにひとりも乗客はいなかった。外をのぞくと、うす暗いプラットフォームにも、きょうは珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、たゞ、ふりに入れられた小夫が一匹、時々悲しそうにほえたてていた。これらは、その時の私の心持と、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭のうちには言いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私はがいとうのポケットへじっと両手を突っこんだまゝ、そこにはいつている夕刊を出して見ようという元氣さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私は、かすかな心のくつろぎを感じながら、うしろの窓わくへ頭をもたせて、目の前の停車場がずる／＼とあとずさりを始めるのを、待つともなく待ちかまえていた。ところが、それよりも先にけた／＼ましいひよりげたの音が、改札口の方から聞え出したと思うと、まもなく車掌の何か言いの／＼する声とともに、私の乗っている二等室の戸ががらりとあいて、十三、四の小娘がひとり、あわただしく中へはいつて来た。と同時に一つずしりと揺れて、おもむろに汽車は動き出した。

「小娘は、油けのない髪をひつつめのいちようがえしに結って、横なでのあとのあるひゞだらけの両ほおを氣持の悪いほど赤くほてらせた、いかにもいなか者らしい娘だった。しかも、あかじみたもえぎ色の毛糸のえりまきがだらりと垂れさがったひゞの上には、大きなふろしき包があった。そのまた包を抱えた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから、その服装が不潔なものやはり不快だった。最後に、その二等と三等との区別さえもわきまをないあろかな心が腹だたしかった。だから、まさたばこに火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたという心持もあって、今度はポケットの夕刊を漫然と拡げて見た。

「それから幾分か過ぎたのちであった。ふと何かにちびやかされたような心持がして、思わずあたりを見まわすと、いつのまにか例の小娘が、向こうがわからぬ席を私の隣へ移して、しきりに窓をあけようとしている。が、重いガラス戸はなか／＼思うようにあかないらしい。あのひゞだらけのほおは、いよ／＼赤くなって、時々はなをす／＼こむ音が、小さな息の切れる声といっしょに、せわしく耳へはいつて来る。これはもちろん私にも、幾分ながら同情をひくに足るものには相違なかった。しかし、汽車が今まさにトンネルの口へさしか／＼ろうとしていることは、暮色の中に枯れ草ばかり明かるい側の山腹が、ま近く迫って来たのでも、すぐにがてんの行くことであつた。にもか／＼ならず、この小娘は、わざ／＼しめてある窓の戸をあけようとする、その理由が私にはのみこめなかつた。いや、それが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考えられなかつた。だから私は、腹の底に依然としてけわしい感情をたくわえながら、あの霜焼けの手がガラス戸をあけようとしている様子を、まるでそれが永久に成功しないことでも祈るような冷酷な目でながめていた。するとまもなく、すさまじい音をはためかせて汽車がトンネルへなだれてむと同時に、小娘のあけようとしたガラス戸は、とう／＼に息苦しい煙になって、もう／＼と車内へみなぎり出した。元來のどを害していた私は、ハンカチを

顔に当てるいとまざえなく、この煙を満面に浴びせられたちかけで、ほとんど息もつけないほど、せきこまなければならなかった。が、小娘は私にとんじやくするけしきも見えず、窓から外へ首をのばして、やみを吹く風にいちようがえしのびんの毛をそよがせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中にながめた時、もう窓の外が見るく明かるくなつて、そこから、土のにおいや枯れ草のにおいや水のにおいが、ひやくかに流れこんで來なかつたなら、ようやくせきやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしにかりつけてでも、また、もとの通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし、汽車は、その時分には、もうやすくとトンネルをすべりぬけて、枯れ草の山と山との間にはさまれた、ある貧しい町はずれの踏切に通るかゝつていた。踏切の近くには、いづれも見すばらしいわら屋根やかわら屋根がごみくくとせま苦しうたてこんで、踏切番が振るのであるう、たゞ一りゆうのうす白い旗がものうげに暮色をゆすつていた。やつとトンネルを出たと思ふ——その時、その蕭索とした踏切のさくの向こうに、私は、ほちの赤い三人の男の子が、めじろ押しに並んで立っているのを見た。かれらはみな、この曇天に押しすくめられたかと思ふほど、そろつてせいが低かつた。そうしてまた、この町はずれのいんさんな風物と同じような色の着物を着ていた。それが、汽車の通るのを仰ぎ見ながらいっせいに手をあげるが早いか、いたいけなものを高くそらせて、なんとも意味のわからない喊声を生けんめいにほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身をのり出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつと伸ばして、いきちよく左右に振つたと思ふと、たちまち、心をおどらすばかり暖かな日の色に染まつているみかんが、ちよと五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらくと空から降つて行つた。私は思わず息をのんだ。そうして、せつなにいっさいを了解した。小娘は、ちそらくこれから奉公先へちもむこうとしてゐる小娘は、そのふところに藏していた幾ばくかのみかんを窓から投げて、わざと踏切まで見送りに來た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切と、小鳥のように声をあげた三人の子供たちと、そうして、その上に乱れ落ちるあざやかなみかんの色と——すべては汽車の窓の外に、またしくひまもなく通り過ぎた。が、私の心の上には、せつないほどはつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、あるえたいの知れないほからかな心持がわきあがつて來るのを意識した。私は、昂然と頭をあげて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は、いつかもう私の前の席に歸つて、あい変わらずひいだらけのほちをもえぎ色の毛糸のえりまきにうずめながら、大きなふるしき包を抱えた手に、しつかりと三等切符を握つていた。

(芥川龍之介の文による)

八 非凡なる凡人

上

ぼくの子供の時からの友に桂正作という男がある。ことし二十四で、今は横浜のある会社に技手として雇われ、もつぱら電氣事業に従事しているが、まずこの男ほど類の違つた人物はあるまいかと思われる。

非凡人ではない。けれども凡人でもない。さりとて偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人と
いうが最も適評かとぼくは思っている。

ぼくは知れば知るほど、この男に感心せざるを得ないのである。感心するといったところで、秀吉
や、ナポレオンや、その他の天才に感心するのとは違う。この種の人物は千百歳にひとりも出るか出
ないかであるが、桂正作のごときは、平凡なる社会が常に産出しうる人物である。また、平凡なる社
会が常に要求する人物である。であるから、桂のような人物がひとりふえれば、それだけ社会が幸福
になるのである。ぼくが桂に感心するのは、この意味においてである。また、ぼくが桂を非凡なる凡
人と評するのも、この故である。

ぼくらがまだ小学校に通っている時分であった。ある日、その日は日曜で、ぼくは四、五人の学校な
かまと小松山へ出かけ、戦争のまねをして、われこそ秀吉だとか、義経だとか、十三、四にもなりな
がら、ばかげたわんぱくを働いて大あばれにあれば、ついにのどがかわいて来たので、山のすぐふも
とにある桂正作のうちの庭へ、裏山からどや／＼と駆けあがり、案内もこわす、いきなり井戸端に集
まって、われがちにと水を飲んで飲んだ。

すると、二階の窓から正作が顔を出してこちらを見ている。ぼくはこれを見るや、「来ないか。」と呼
んだ。けれども、かれはいつにないまじめくさった顔つきをして、頭を横に振った。わんぱくの方で
も人並みのことをしてのける桂正作が、不思議にきょうは出て来ないので、ぼくらしめては誘わ
ず、そのまままた山に駆け登ってしまった。

騒ぎくたびれてみんな散り／＼にわがやへ帰り、ぼくはひとり桂のうちに立ち寄った。黙って二階

へあがって見ると、正作は「テーブル」に向かい、いすに腰を掛けて、一心に何か読んでいる。

もつとも「テーブル」といっても、そまつな日本机の両脚の下に継台をした品物で、いすも足継の
下に箱を置いただけのものである。けれども、正作はまじめにこのくふうをしたので、学校の先生が
日本流の机は衛生にわるいと言ったことばをなると感心して、すぐこれだけのことを実行したの
である。そして、その後常にこのいす、テーブルでかれは勉強していたのである。そのテーブルの上
には教科書その他の書籍をていねいに重ね、筆墨の類まで決して乱雑に置いてはならない。かれは日曜の
いい天気であるにもかゝらず、なんの本かわき目もふらずに読んでいたので、ぼくはそのそばに行
って、

「何を読んでいるのだ。」と言いながら見ると、洋とじの厚い本である。

「西國立志編だ。」と答えて顔をあげ、ぼくを見たそのまなざしはまだ夢のさめない人のようで、心は
なお書籍の中にあるらしい。

「あもしろいかね。」

「うん。あもしろい。」

「日本外史とどっちがあもしろい。」と、ぼくが問うと、桂は微笑を含んで、ようやくわれにかえり、
いつもの元氣のよい声で、

「そりゃあ、この方があもしろいよ。日本外史とは物が違う。ゆうべ、ぼくは梅田先生のところから借
りて来てから読みはじめたけれども、あもしろくてやめられない。ぼくはどうしても一冊買うのだ。」
と言って、うれしくてたまらないふうであった。

その後桂はついに西國立志編(スマイルスの自助論)を一冊買ひ求めたが、その本というのは粗末至極な洋とじて、一度読みおわらないうちにすでにばらばらになりそうなるもの故、かれはこれをしようぶな麻糸でとじなした。

この時桂もぼくも数え年の十四歳であつた。桂は一度西國立志編のうまみを知つて以後は、何度この書を読んだか知れない。ほとんどあんしょうするほど熟読したらしい。そして今日といえども常にこれを座右に置いている。

げに桂正作は生きた西國立志編といつてよからう。桂自身でもそう言っている。

「もしぼくが西國立志編を読まなかつたらどうであつたらう。ぼくの今日あるのは全くこの書ののおかげだ。」と。

けれども西國立志編を読んだ者は、洋の東西を問はず幾百万人あるかしろれないが、桂正作のように、「予を作りしものはこの書なり。」と明言しうる者は果たして幾人あるだらう。

天が與えた才能からいうと、桂は中位の人たるにすぎない。学校における成績も中等で、同級生のうち、かれよりもすぐれた少年はいくらもいた。また、かれはかなりのわんぱく者で、ぼくらといっしょにずいぶんあばれたものである。それで、学校においても郷党にあつても、特に人から注目せられる少年ではなかつた。

けれども天の與えた性質からいうと、かれは率直で、單純で、そしてどこかにあさうべからざる勇猛心を持つていた。勇猛心というよりか、敢爲の氣象といつた方がよからう。即ち一轉すれば冒險心となり、再轉すれば山氣ヤマキとなるのである。現にかれの父は山氣のために失敗し、かれの兄は冒險のた

めに死んだ。けれども正作は西國立志編のおかげで、この氣象に訓練を加え、堅実なる有爲の精神としたのである。

小学校を卒業するや、ぼくは縣下の中学校にはいつてしまい、しばらく故郷を離れたが、正作は家政の都合で、そういうわけにゆかず、周旋する人があつて、なにがし銀行に出ることになり、給料四円か五円かでなにがし町まで二里の道を朝夕往復することになった。

まもなく冬休みになり、ぼくは歸省の途についてふるさと近く車で來ると、小さな坂がある。そのふもとで車をおり、手荷物を車夫に託し、自分はステッキ一本で坂を登りかけると、ぼくの五、六間さきを行く少年がある。身に古ぼけたとんびを着て、手に古ぼけた手さげカバンを持って、靜かに坂を登りつゝある、その姿がいかに桂正作に似ているので、

「桂君じゃないか。」と声をかけた。うしろを振り向いて破顔一笑したのはまさしく正作。立ちどまつてぼくを待ち、

「冬休みになつたのか。」

「どうだ、きみはまだ銀行に通つてるか。」

「うん、通つてるけれども、少しもおもしろくない。」

「どうしてや。」

と、ぼくは驚いて聞いた。

「どうしてというわけもないが、きみなら三日としんぼうができないだらうと思う。第一ぼくは、銀行業からしてぼくの目的じゃないのだから。」ふたりは話しながら歩いた。車夫のみ先へやり。

「何がさみの目的だ。」

「工業で身を立てる決心だ。」と言って正作は微笑し、「ぼくは毎日この道を往復しながらいろいろ考えたが、発明に越す大事業はないと思う。」

ワットやステイヴンソンやエジソンはかれが理想の英雄である。そして西國立志編はかれのバイブルである。

ぼくの黙ってうなづくのを見て、正作は更にことばをつぎ、

「だからぼくは來春は東京へ出ようかと思っている。」

「東京へ。」と驚いて問い返した。

「そうさ、東京へ。旅費はもうできたが、向こうへ行つて三月ばかりを食えるだけの金を持っていないければ困るだろうと思う。だからぼくは父に頼んで來年の三月までの給料は全部ぼくがもらうことにした。だから四月早々はたてるだろうと思う。」

桂正作の計画はすべてこの筆法である。かれはずいぶん少年にありがちな空想を描くけれども、計画を立ててこれを実行する上については、少年の時から今日にいたるまで少しも変わらず、一定の順序を立てて一步一步と着々実行してついに目的通りに成就するのである。むろんこれは西國立志編の感化でもあろう。けれども一つにはかれの性情が祖父に似ているからだと思われる。かれの祖父の非凡な人であったことを今こゝでくわしく話すことはできないが、その一つをいえば、眞書太閤記三百巻を写すに十年計画を立てて、ついにみごと写しおわつたことがある。ぼくも桂のうちでこれを実見したが、今でもその氣根の大いなるに驚いている。正作は確かにこの祖父の血を受けたに違いない。も

しくはこの祖父の感化を受けただろうと思う。

途上、種々の話でわれ／＼ふたりは夕暮れに帰宅し、その後ぼくは毎日のように桂に会つて互に將來のアンビションを語り合つた。冬休みが終り、いよくぼくは中学校の寄宿舎に帰るべくふるさとを出立する前の晩、正作がたずねて來た。そして言うには、今度会うのは東京だろう、三、四年は帰郷しないつもりだからと。ぼくもそのつもりで正作に別れを告げた。

明治二十七年の春、桂は計画通りに上京し、東京から二度手紙をよこしたけれど、いつも無事を知らせるばかりで別に着京後の様子を告げない。また、くにの者もだれもどうして正作が暮らしているか知らない。父母すら知らない。たゞ何人も疑われないことが一つあった。いわく、桂正作はなんらかの計画を立ててその目的に向かつて着々歩を進めているだろうという事実である。

ぼくは三十年の春上京した。そして宿がさまるや、さっそく築地何町何番地なんのながし方という桂の住所をたずねた。この時ふたりはすでに十九歳。

下

午後三時ごろであった。ぼくは築地何町をすみからすみまでさがして、ようやくのこと桂の住みかさがし当てた。容易にわからぬも道理、なにがし方というそのなながしは車屋の主人ならんとは。とある横町の貧しげな家ばかり並んでいる中にはさまつて九尺間口の二階屋、その二階が、「生ける西國立志編」君の巢である。

「桂君という人があなたのところにいますか。」

「へい、いらっしゃいます。あの、書生さんでしょう。」とのあいさつ。声を聞きつけてみし／＼と階

段をおりて来て、「やあ。」と現われたのが、一別以來三年会わなんだ桂正作である。

足も立てられないようなきたない疊を二、三枚歩いて、狭い急なはしご段を登り、通された座敷は六疊敷、すくけた天井低く頭を圧し、疊も黒く壁も黒い。

けれども黒くないものがある。それは書籍。桂ほど書籍をたいせつにするものは少ない。かれはいかなる書物でも決して机の上や、座敷のまん中に放擲するようなことなどはしない。こういう桂は書籍ばかりをたいせつにするようだが必ずしもそうでない。かれは身のまわりの物すべてを大事にする。

見ると机もかなりりっぱ。本箱もさまで黒くない。かれはその必需品を粗略にするほど、東洋豪傑風の美点も悪癖も受けていない。今の流行語でいうと、かれは西國立志編の感化を受けただけにすくぶるハイカラ的である。今にして思う。ぼくはハイカラの精神のわが桂正作を支配したことを天に感謝する。

机の上を見ると、教科書用の書籍その他が、例のごとく整然として重ねてある。その他周囲の物すべてがみなその所を得て、きちんとしている。

へやの下部にして黒く暗澹たるを憂うるなかれ。桂正作はその主義と、その性情によって、すべてこれらの黒くして暗澹たるものをば化して純潔にして高貴、感嘆すべく畏敬すべきものとなしているのである。

かれは例のごとくいとも快活に胸臆を開いて語った。ぼくの問うがまに／＼、上京後のかれの生活をば、恥じもせず、誇りもせず、平易に、率直に、くわしく話して聞かせた。

かれほど虚栄心の少ない男は珍しい。その境遇に処し、その信ずるところを行うて、それで満足し、安心し、そして勉勵している。かれは決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことをなして、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

一別以來、正作のなしたことを聞くと実にこの通りである。ぼくは聞いているうちにもますます／＼かれを尊敬する念を禁じえなかつた。

かれは計画通り三箇月の糧を蓄えて上京したけれども、坐してこれをくらう男ではなかつた。何がなもしろい職を得たいものと、まず東京市中を足にまかしてへめぐり歩いた。そして思いついたのは新聞賣りと砂書き。九段の公園で砂書きのあやじを見て、かれは直ちにこれと物語り、事情を明かして弟子入りを頼み、それより二、三日の間けいこをして、まもなく大道のかたわらにすわり、一銭、五厘、時には二銭を投げてもらってでたらめを書き、いくらかずつの収入を得た。

ある日、かれは客のなさまに、自分で勝手なことを書いては消し、ワット、ステイヴンソン、などという名を書いていると、八つばかりの男の子を連れた身なりのよい婦人が前に立った。「ワット」と子供が読んで、「かあさま、ワットとはなんのこと。」と聞いた。桂は顔をあげて子供にわかりやすいようにこの大発明家のことを話して聞かせ、「坊さまも大きくなったらこんなえらい人になりなさいよ。」と言った。そうすると婦人が、「失礼ですけれど。」と言いつゝ二十銭銀貨を手渡しして立ち去った。

「ぼくはその銀貨をつかわないでまだ持っている。」と正作は言つて罪のない微笑をもらした。

かれはかく労働している間、その宿所は本賃宿、夜は神田の夜学校に行つて、もっぱら数学を学ん

でいたのである。

かくてその年も暮れ、二十八年の春になって、かれは首尾よく工手学校の夜学部に入學したたのである。

かつ問いかつ聞いているうちに夕暮れ近くなった。

「飯を食いに行こう。」と、桂は突然言つて、机の引き出しから手早くがま口を取り出してふところへ入れた。

「どこへ。」と、ぼくは驚いて尋ねた。

「飯屋へさ。」と言つて正作は立ちかけたので、

「いや、飯ならば宿へ歸つて食うから心配しない方がいいよ。」

「まあ、そんなことを言わないでいっしょに食いたまえな。そして今夜はこゝへとまゐりたまえ。まだ話がたくさん残つてある。」

ぼくもその意に従い、ふたりして車屋を出た。道の二、三丁も歩いたが、桂はその間も愉快に話しながら、國もとのことなどを聞き、ことしのうちに一度くりにへ歸りたいなど言つていた。けれどもぼくは桂の生活の様相から察して、三百里外の故郷へ往復することの、とうてい言うべくして行かうべからざるを思い、別に氣にもとめず、歸れたら一度歸つて父母を見舞いたまえぐらいの軽いあいさつをしてゐた。

「こゝだ。」と言つて桂は先に立つて、なわのれんをくゞつた。ぼくはびっくりして、しばしためらつてみると、うちから、

「あゝ、さしみ。」と呼んだ。しかたがないからはいると、桂はほどよき場所に陣取つて、さみを食んでこつちを見ている。見まわすと、桂のほかにも四、五名の労働者らしい男がいて、長い食卓について、飯を食う者、酒を飲む者、ことのほか静肅である。ふたりさし向かいで卓によるや、

「ぼくは三度三度こゝで飯を食うのだ。」と、桂は平氣で言つて、「さみは何を食うか、なんでもできるよ。」

「なんでもいゝ、ぼくは。」

「そうか、それでは。」と、桂は女中に向かつて二、三品命じたが、その名はふちょうのようで、ぼくにはわからなかった。しばらくすると、さしみ・煮ざかな・煮しめ・しるなどが出て、飯を盛った茶わんに香の物。

桂はうまそうに食いはじめたが、ぼくはなんとなくきたならしい氣がして食う氣にならなかつたのを無理に食いはじめていると、思はず涙がこみあげて來た。いや／＼ながらはしを取つて二口三口食うや、卒然、ぼくは思った。あゝこの飯はこの有爲なる、勤勉なる、独立自活してみずから教育しつつある少年が、労働してもうけた金で、心ばかりのちそうをしてくれる好意だ、それをなんぞや、まずそうにくらうとは、桂はこゝで三度の食事をするではないか、これをいや／＼ながら食う自分のはかれの竹馬の友といわれようかと、そう思うとぼくは思はず涙をのんだのである。そしてぼくは急に胸がすが／＼して、桂とともにうまく食事をして、なわのれんを出た。

その夜ふたりで薄いふとんにいっしょに寝て、夜のふけるのも知らず、小さな豆ランプのおぼつかない光のもとで、くりにのことやぼかの友の上のことや、行く末の望みを語り合つたことは、今でも思

い起すと、楽しいなつかしいその夜のおさまが目の先に浮かんで来る。

その後、ぼくと桂は互に往來していたが、早くもその年の夏休みが来た。するとある日、桂がぼくの下宿屋へ来て、

「ぼくはくはへ帰って来ようかと思う。実はもうきめているのだ。」と言う意外なことば。

「それはいいけれどもきみ……。」と、ぼくはすぐ旅費などのことを心配して口を開くと、

「実は金もできているのだ。三十円ばかり貯蓄しているから、往復の旅費とみやげ物とで二十円あったらよかろうと思う。三十円みんなつかってしまおうとあとで困るからね。」と言うのを聞いて、ぼくはますますながらかれの用意のほどに感じ入った。かれの話によると二年前からすでに帰省の計画を立ててそのつもりで貯金したとのこと。

そこでぼくも大いに喜んでかれの帰國を送った。かれは二年間の貯蓄の三分の二を平気でなげうって、にしき絵を買ひ、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋をたつた。

翌年三十一年にめでたく学校を卒業し、電氣部の技手として横浜の会社に給料十二円で雇われた。

その後今日まで五年になる。その間かれは何をしたか。たゞその職分を忠実に勤めただけか。そうでなう。

かれは大なることをしている。かれの弟がふたりあって、ふたりともかれの兄、逃亡した兄に似て手に合わないつび者、ひとり五郎といい、ひとり荒雄という。五郎は正作が横浜の会社に出たと聞かや、國もとを飛び出して、東京に來た。正作は五郎のために、所々奔走して、あるいは商店に入れ、あるいは学僕がくべとしたけれど、五郎はいたるところで失敗し、いたるところを逃げ出してしま

う。

けれども正作は根氣よく世話をしていたが、ついに五郎を自分のそばに置き、種々に訓戒を加え、西國立志編をくり返して読ませ、そして工手学校に入れてしまった。わずかの給料でみずからくり、弟を養ひ、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は三十四年にいたって現われ、五郎は技手となつて、今は東京芝区のなにか会社に雇われ、まじめに勤務しているのである。

荒雄もまた國を飛び出した。今は正作と五郎とふたりでこの弟の処置に苦心している。

ことしの春であつた。夕暮れにぼくは、横浜野毛町のげまちに桂をたずねると、宿の者が、「桂さんはまた会社です。」と言うから、会社の様子も見たく、その足で会社をとらうた。

桂の仕事をしている場所に行ってみると、ぼくは電氣のことをくわしく知らないから十分の説明はできないが、一本の太い鉄柱を擁して数人の人が立っていて、正作はひとりその鉄柱の周囲を幾たびとなくまわつて熱心に何事かしている。もはや電燈がついて眞晝のごとくこの一群れの人を照らしている。人々は黙して正作のするところを見ている。機械に狂いの生じたのを正作が檢分し、修繕しているのらしい。

桂の顔、様子。かれは無人の地において、われを忘れ世界を忘れ、身も魂も、今そのなしつゝある仕事に打ちこんでいる。ぼくは桂の容貌かうぼうのかくまでにまじめなるを見たことがない。見ているうちに、ぼくは一種の莊嚴の感に打たれた。

(國木田独歩の文による)

九 ビノチオ

「ビノチオ」というのは、イタリア童話の名高い主人公「木製人形」の名まえである。本國では「ビノツキオ」と呼ばれているが、日本では「ビノチオ」で通つて來ているので、この名を用いることにした。本課は、ビノチオ童話の一節を、人形しばいの脚本に書きかえたものである。読んでみると、やさしいし、子供っぽくて物足りないようにも感じられるが、人形を製作したり、また、この人形を使つて演出することを考へると、必ずしも容易ではない。この脚本を読み合つたり、演出したりする間に、國語學習の楽しい世界が開けるであらう。

なお、今までに讀んだ童話や物語などをくふうして脚色してみよう。そうして更に演出してみたら、一段とおもしろいであらう。

出て來る人形

ビノチオ
 おとうさん
 少年
 少
 年
 屋
 人形一
 人形二
 親方

第一幕 ビノチオのへや

正面右寄りに窓、左の方に入口。

幕があくと、ビノチオとおとうさんが話している。

ビノチオ 「おとうさん、ぼく、とてもうれいんです。ぼく、おとうさんが大すきです。」

父 「ビノチオや、そんなにうれいのかい。おまえがそんなに喜んでくれると、おとうさんまでがうれくなるよ。」

ビノチオ 「だつておとうさんはぼくを作つてくれた上に、こんなに上等な上着だの帽子だのまで作つてくれたんだもの。ぼく、よく似合うでしょう。まるで紳士のようなねえ。」

父 「紳士のようなね。だが、ビノチオや、紳士というものはね、たとえ身なりはそまつでも、いつも清潔にしているものなんだよ。そして美しい心を持っていて、正しい行いをするのでなくて、ほんとの紳士とはいえないんだよ。」

ビノチオ 「おとうさん、ぼく、ほんとの紳士になるよ。」

父 「そうか、そうか。」

ビノチオ 「それからね、ぼく、学校へも行くよ。」

父 「ほら、学校へ行くかい。」

ビノチオ 「うん、だつて紳士ってなんでも読めるんでしよう。ぼく、まだなんにも読めないから学校へ行つて勉強するんだ。」

父 「そうか、それはよい。」

ビノチオ「だけど、おとうさん、学校へ行くには本がいるんでしょ。」

父「そうだね。」

ビノチオ「おとうさん、本、買ってよう。」

父「うん。」

ビノチオ「ね、おとうさん、買ってよう。」

父（ひとりごと）「こまったな。買ってやりたいのだが、おとうさんは一文なしの貧乏で、本を買ってやるお金もない。」

おとうさんは、しばらく考えている。

父「よろしい。ビノチオや。おとうさんはちょっと出て来るからね。待っておいで。」

急いで左の方へ出て行く。

ビノチオ「おとうさん、おとうさあん。」

ビノチオ、父のあとを追って戸口まで行き、また、もどつて来る。

ビノチオ「おとうさん、本を買って来てくれるのかしら。」

ビノチオ、窓から外を見る。

ビノチオ「あ、雪が降って来た。」

どこかの子供たちが歌う歌が聞えて来る。しばらくして、おとうさんが左の方から、手に本を持って出て来る。

父「さあ、ビノチオや、本を買って来たよ。」

おとうさん、本をビノチオに渡す。

ビノチオ「あ。本だ、ほんとに本だ。おとうさん、ありがとう。」

ビノチオ、おとうさんが上着を着ていないのに気がつく。

ビノチオ「おとうさん、上着どうしたの、どこへ脱いで来たの。」

父「なに、上着かね。おとうさんは暖かいからもういらないんだよ。それより、これでもう学校へ行けるんだね。」

ビノチオ「わかった。おとうさんは、ぼくに本を買ってくれるために、こんなに寒いのに上着を売ってんでしょ。おとうさん、すみません。」

ビノチオ、おとうさんに抱きつく。

父「いいんだよ、いいんだよ。」

おとうさんはビノチオをあげしく抱きしめる。

静かに幕をしめる。

第二幕 人形しばいの小屋の前

右の方に人形しばいの小屋が見える。

樂隊が聞えている。幕があくと、ビノチオ、左の方から、本を持って出る来る。

ビノチオ「さ、早く学校へ行こう。あれ、なんだろう。あんな所で何をやっているんだろう。おもしろそうだなあ。」

右の方から少年が出て来る。

ビノチオ「あの。きみ、きみ。」

少年「なんだい。」

ビノチオ「あれ、何やってるの。」

少年「見ればわかるじゃないか。ほら、看板に書いてあるだろう。」

ビノチオ「なんて書いてあるの。ぼく、読めないんだよ。」

少年「あんなやさしい字が読めないのかい。』にんぎょうしばい』って書いてあるんだよ。」

ビノチオ「おもしろいか。」

少年「おもしろいさ。だけど五田いるんだよ。」

ビノチオ「ぼく、見たいな。だけど、ぼく、お金持ってないんだ。きみ、ぼくに五田貸してくれないか。」

少年「いやだよ。」

ビノチオ「そんなら、きみ、この上着、五田で買ってくれないか。」

少年「なあんだ、千代紙の上着なんか。」

ビノチオ「この帽子は。」

少年「そんなバンくずの帽子なんか、雨にあつたらだいなしだ。」

ビノチオ「そんなら、きみ、この本は。」

少年「きみ、子供どうして何か買ったたり買ったたりするのはいけないんだよ。」

少年、人形しばいの小屋の方へはいる。

くず屋、左の方から出て来る。

くず屋「にいちちゃん、おじさんが買ってあげようか。」

ビノチオ「あ、おじさん買ってくれる。」

くず屋「五田ならね。」

くず屋、ビノチオから本を受け取って、お金を渡す。

ビノチオ「ありがとう、ぼく、人形しばいを見よう。」

ビノチオ、人形しばいの小屋の方へはいる。

小屋の方から拍手が聞えて来る。

くず屋（ひとりごと）「これはなかくいい本だぞ、うまい、うまい。『歩きはじめく』くずうい、くず

うい、くずやちはらあさ。」

くず屋、左の方へはいる、静かに幕をしめる。

第三幕 小屋の中（舞台裏）

箱が置いてある。

幕があくと、ビノチオが箱によりかゝって泣いている。

ビノチオ「あゝん、あゝん、あとうさん、あとうさあん。」

人形一、人形二、左の方から出る。

人形一「まあ、かわいそうにね。ビノチオ。ほんとにビノチオには罪はないのにねえ。」

人形二「そうだ、おれたちが悪かったんだよ。ビノチオを舞台の上にあげて、しばいをこわしてしまつたからなんだ。ビノチオ、許しておくれね。」

ビノチオ「あゝん、あん／＼、おとうさあん。ぼくが悪かったんです。学校へ行く途中で、しばい小屋、なんかへはいつたからです。ごめんなさい、おとうさあん。」

親方、右の方から出る。

親方「ごら、だれだ。そんなところでござ／＼騒いでいるのは。」

人形一、人形二、箱のかげに隠れる。

親方「小僧、まだ泣いてるのか。泣くのをやめろ。おれは泣き声が大さらいなんだ。」

ビノチオ「おじさん、ぼく、帰らないと、おとうさんがかわいそうなんです。たつたひとりぼっちなんです。」

親方「なに、ひとりぼっちだと。おかあさんはいないのか。」

ビノチオ「はい、おかあさんはいません。」

親方「ふうん、おとうさんは何してるんだ。」

ビノチオ「貧乏してるんです。」

親方「なに、貧乏してる。はっははは。」

ビノチオ「そうなんです。ぼくの本を買うのに、おとうさんは上着を賣って、買つてくださったほどなんです。だからぼく、働いてお金もうけたら、おとうさんにりっぱな上着を買つてあげるんです。」

親方「なんだって。上着を賣つて本を買つてくれたんだって。」

ビノチオ「そうです。だのに、ぼく、人形しばいにはいりたくて、その本を賣ってしまったんです。」

親方「こら、おれはな、今夜、焼肉をたべなくちゃならんだ。それで薪のかわりに、しばいをめちやめちやにしたおまえを火にくべるつもりだったんだがな、おまえのおとうさんにめんじておまえを許してやる。」

ビノチオ「えっ、許してくださるんですか。ほんとですか。このぼくを許してくださいさるんですか。」

人形一、人形二、箱のかげから出る。

親方「よし。では、今晚はおまえたちをビノチオのかわりに火にくべてやる。」

ビノチオ「えっ、ぼくを助けるかわりにこの人たちを焼くんですって。それはいけません。悪いのはぼくなんです。その人たちを焼くくらいなら、ぼくを焼いてください。さあ、ぼくを焼いてください。」

親方「はくしよん、はあくしよん。おまえはなんという感心な子だ。よろしい。みんな許してやる。」

ビノチオ「えっ、ほんとですか。みんな許してくださいさるんですか。」

親方「そうだ、みんな許す。今夜はな——はあくしよん——焼肉を食うのはやめだ。」

三人、喜ぶ。

親方「こゝに金貨が五枚ある。おまえがなくなつたお金のかわりにこれをやる。これでおとうさんの上着もおまえの本も買うがよろ。」

親方、ビノチオに金貨を渡す。

ビノチオ「おじさん、ぼくにこんなに金貨までくださるんですか。あゝ、なんというありがたいこと
だろう。」

人形二「ビノチオ、よかったなあ。」

人形一「よかったわねえ。」

ビノチオ「おじさん、ありがとう。みなさんありがとう。」

ビノチオ、おじぎをくり返す。

親方「あはははっは。」

人形一、人形二も笑う。にぎやかな笑いのうちに幕をしめる。

(松葉重庸の作による)

中等國語

(2)

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Sept. 4, 1947)

昭和二十二年九月四日印刷 同日翻刻印刷
昭和二十二年九月八日発行 同日翻刻発行
〔昭和二十二年九月八日 文部省検査済〕

著作権所有

著作
者兼
発
行
者

文

部

省

翻
刻
者

東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

代表者 阿部眞之助

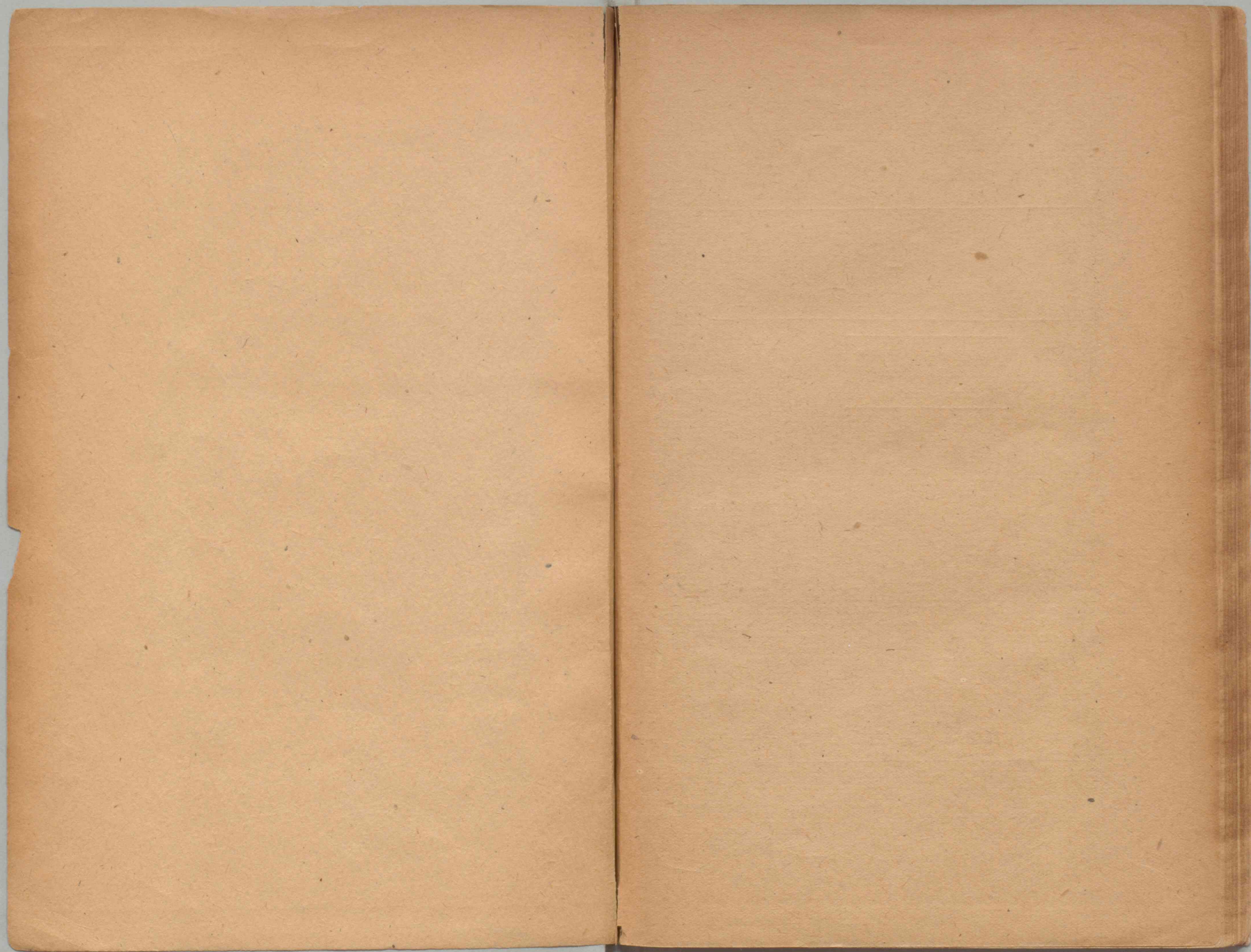
印
刷
者

東京都北区稻付町一丁目二〇八番地
二葉印刷株式會社

代表者 大野治輔

發行所

中等學校教科書株式會社



附中
二五

小川
三十五

広島大学図書

0130449578

